

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 27 日現在

機関番号：43922

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24730561

研究課題名(和文) 幼児期の教示行為の発達過程とそれを支える保育者の役割の検討

研究課題名(英文) The development of inhibitive teaching behavior in preschool children and understanding of the preschoolers' teaching activities by children workers.

研究代表者

小川 絢子(OGAWA, Ayako)

名古屋短期大学・保育科・助教

研究者番号：60609668

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、幼児の「教えないで見守る」行為の発達過程を検討し、加えて、子どもの教える行為の発達に応じて保育者の認知や働きかけがいかに変化するのかを明らかにすることであった。幼児を対象に課題を行い、学び手の「自分でできるようになりたい」という欲求が明示された条件においては、年長児で「教えないで見守る」を選択する子どもが増えることが明らかになった。また、保育者への質問紙調査から、保育者は子どもの年齢にかかわらず、「子どもは教えるだろう」と予測し、学び手の欲求が明示されない条件においても「教えないで見守る」ことを子どもに期待することが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Children's teaching behavior becomes progressively more sophisticated in early childhood. It is important for young children to learn how to use teaching skills in everyday life. The purpose of this research was to investigate the development of inhibitive teaching in preschool children. The results showed that 5 to 6 year old children could select inhibitive teaching behavior only when the information that protagonist wanted to solve the problem by oneself was presented in the story. These results suggested that preschoolers could infer another person's mental states and inhibit to teach when friend's desire was presented clearly. The childcare workers, however, expected and encouraged the young children to inhibit their teaching activities and watch over their friends even in the case the absence of the friend's mental states. It is suggested that the development of inhibitive teaching behavior in preschool children should be influenced by these expectations and encouragement.

研究分野：発達心理学

科研費の分科・細目：心理学、教育・社会心理学

キーワード：幼児期 教示行為 抑制 見守り 保育者

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究背景

幼児期後期は、子どもどうしが教えあうという行為が多く成立するようになる時期である。服部(1998)によると、子どもは、教えあう関係を通して他者への共感を育み、新たな自他認識を発達させることが報告されており、幼児期における教える行為(以降、教示行為と呼ぶ)の発達は、自他理解の発達と関連する重要なテーマであるといえる。2008年に改訂された幼稚園教育要領でも、就学前教育において、「集団生活の中で幼児どうしが協同する経験を重ねること」の重要性が述べられている(無藤, 2008)。子どもが協力して目標を達成する際には、子どもどうしの教えあいが多く生じる。つまり、保育、幼児教育の立場においても、教示行為の発達は、幼児期後期の人間関係の形成を援助、指導していく上で、重要な観点であるといえる。

発達研究においては、近年、幼児の教示行為および教示行為の理解を検討した研究が増え始めている(赤木, 2004; Davis-Unger & Carlson, 2008; Frye & Ziv, 2005; Strauss et al., 2002)。発達研究において、教示行為(teaching)とは、「自他の知識の差異を認識し、他者の知識を増やそうとする意図的な行為」と定義される(Frye & Ziv, 2005)。教示行為を扱った研究が盛んになっている背景としては、教示行為が心の理論に代表される社会的認知の発達と密接に関連する(Davis-Unger & Carlson, 2008; Strauss et al., 2002)概念であり、自分や他者の欲求、意図、信念、感情など様々な心的状態の理解を必要とすることが挙げられる。さらに、教示行為は文化における伝統や価値、スキルを伝達していくための強力なツールであり(Tomasello, 1999)類人猿には教示行為はみられないため、人間固有の社会的知性や文化の伝達過程の起源を明らかにできる可能性を持つ(赤木, 2008)といった重要性も指

摘されている。

(2) 先行研究から明らかになった問題

研究代表者は、これまでの研究活動において、幼児期における「心の理論」の発達が、ワーキングメモリや抑制制御のような認知機能の発達に支えられていることを明らかにしてきた(小川・子安, 2008; 2010)。加えて、6歳児が、学び手の心的状態に応じて自身の教示行為をいかに調整するのかを検討してきた(Ogawa, 2010; 小川, 2011)。幼児の教示行為に関する研究は着実に進展してきており、保育や幼児教育の立場からもその重要性は明確であるにもかかわらず、明らかになっていない点も多い。具体的には、次の2点の検討が不十分であるといえる。

幼児期後期における「教えないで見守る」行為の発達

幼児期後期には、子どもどうしの教えあいを通して、時には他者の行動を見守るように自らの行動を調整し、それにより協同的な学びを作り出すことが重視されていることから、他者を「教えないで見守る」行為の発達の重要性は明らかである。しかしながら、教示行為の発達を検討した先行研究では、このような「教えないで見守る」といった行為はほとんど検討されてこなかった。幼児に「教えない」ことが可能かを検討した赤木(2008)においても、「他者のためにあえて教えない」ことの発達は、児童期を待たねばならないとされている。

ただし、先行研究では、「教えないで見守る」行為のどこに子どもが困難さを持つのかは明らかになっていない。教示行為が起こる過程は、学び手の行動や表情といった手がかりから、学び手の知識や信念のような「心的状態を推測する過程」と、学び手の心的状態を理解した上で、それに応じて自分の「教える行為を調整する過程」があると考えられる。小川(2011)では、学び手の心的状態を明示することで、6歳児でも「教えないで見守る」

行為が可能になることを明らかにしてきたが、それ以前からの幼児期の発達的变化については検討されていない。

子どもの教示行為の発達に対する保育者の認知と働きかけ

子どもが協力して活動するためには、他者の心的状態への配慮や行為の調整を行う必要がある。幼児期後期の子どもにとっても、子どもたちだけで対処することが難しい場合も多い。従って、子どもの教えあいは、保育者がいかに子どもの状態を認知し働きかけられるかが重要な問題となる。この点に関して、子どもの協同的な経験を理論的、実践的観点から検討した研究（加藤, 2005 など）が増えつつあるが、保育者が、子どもの教示行為の発達の变化をどのように認知し、どのようにそれを促す働きかけを行っているのかに関して、実証的に検討されていない。

2. 研究の目的

以上の2点について、本研究は子ども自身の発達と保育者の働きかけの両側面から教示行為を検討し、その関係性を明らかにすることを目的とする。

本研究では、幼児期における「教える」行為と「教えないで見守る」行為の発達過程を明らかにしていくことを第1の目的とする。特に、学び手の心的状態を明示した場合に、「教える」行為と「教えないで見守る」行為を子どもがいかに使い分けるのか、その発達の变化を検討する。

さらに、子どもの教示行為に対する保育者の認知と、協同の活動を支える保育者の働きかけについて明らかにすることを第2の目的とする。特に、幼児の年齢に応じて、子どもの教示行為を保育者はいかに認知し、働きかけを変化させていくのかを明らかにし、それが子どもの実際の教示行為の発達とどのように関連するのかを検討する。

3. 研究の方法

幼児を対象に、仮想場面を用いた教示行為の理解課題を実施するとともに、保育者を対象に幼児と同様の条件や場面を使用した質問紙調査を行った。仮想場面を使用し、学び手の心的状態の明示条件を操作することで、「教えないで見守る」行為が可能になる条件を検討した。

幼児の教示行為に対する理解の発達の变化の検討

保育園へ通う年中児、年長児を対象に、個別に課題を実施した。教示行為の理解課題（仮想場面）：学び手である友だちの心的状態（知識・欲求・信念）を操作したストーリーを複数作成し、図版を用いて子どもに呈示し、質問を実施した。

教示行為の発達に対する保育者の認知と働きかけの検討

保育園に勤務する保育者を対象に質問紙調査を実施した。子どもの教示行為に対する質問紙調査：幼児の教示行為の理解課題と同様の課題材料を用い、保育者に子どもが「教える」「教えないで見守る」のどちらを選択すると思うか、子どもに対してどのような働きかけを行うのかについて、選択と記述により回答していただいた。

4. 研究成果

本研究の目的は、幼児の「教えないで見守る」行為の発達過程を検討し、加えて、子どもの教える行為の発達に応じて保育者の認知や働きかけがいかに変化するのかを明らかにすることであった。

幼児を対象とした教示行為の課題を、保育園へ通う年中児、年長児を対象に実施した。理解課題においては、学び手である友だちの心的状態（知識・欲求・信念）を操作したストーリーを複数作成し、教えるか否かの質問とその回答に対する理由づけを求めた。また、子どもの教示行為に対する質問紙調査を保

育園に勤務する保育者に実施した。

(1) 幼児の教示行為に対する理解の発達の
変化の検討

幼児の教示行為については、心的状態が明示されない場面では、年中児も年長児も「教える」ことを選択することがわかった。ただし、欲求状態が明示された場合には、年中児よりも年長児で、「教えないで見守る」を選択する子どもが増えることが明らかになった(表1)。

表1. 年中児、年長児における教示課題への反応(%)

	年中児	欲求明示条件	
		教える	教えないで見ている
明示なし条件	教える	75.9	17.2
	教えないで見ている	3.4	3.4
	年長児	欲求明示条件	
		教える	教えないで見ている
明示なし条件	教える	40	33.3
	教えないで見ている	9.7	20

この結果から、心的状態の明示がなければ、年中児も年長児も学び手に対して「教える」を選択する子どもが多く、幼児期の「教えないで見ている」ことへの理解は、限定的ではあることが明らかになった。一方で、欲求明示条件において、年長児は他者の欲求が明確になれば、「教えないで見ている」を選択していたことから、年長児は、「教えないで見ている」という行為が、他者の欲求に応え、相手の知識獲得につながることを理解し始めている可能性が示唆された。本研究の成果は、The 16th European Conference on Developmental Psychology (第16回ヨーロッパ発達心理学会)において発表した。

(2) 子どもの教示行為の発達に対する保育者の認知と働きかけ

子どもの教示行為に対する保育者の認知

保育者の認知に関しては、保育者は、子どもの年齢や心的状態の明示の有無にかかわらず、「子どもは教える」と認知していた(図1)。また、学び手の心的状態が明示されない

条件において、「教えないで見守る」ことを子どもに期待していることが明らかになった(図2)。

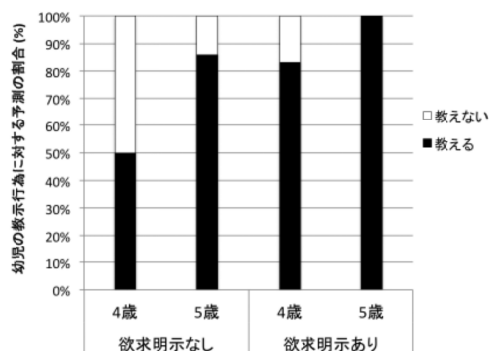


図1. 保育者が予測する幼児の教示行為の割合(%)

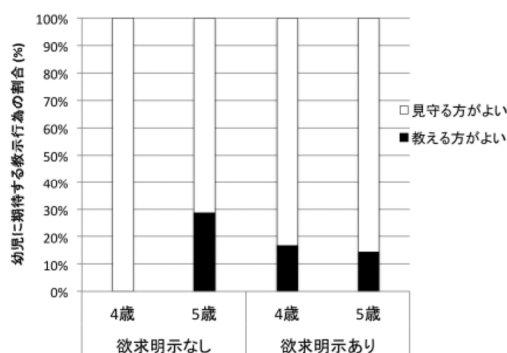


図2. 保育者が幼児に期待する教示行為の割合(%)

本研究の成果については、名古屋短期大学研究紀要第51巻と日本心理学会第77回大会において報告した。

子どもの教示行為に対する保育者の認知

保育者は、自分でやりたいという学び手の欲求が明らかな場合(欲求明示条件)においては、「教えないで見ている」ことを幼児に期待しており、その理由についても、「自分でやりたい」という学び手の意思を尊重するべきだから、といった回答が大多数であった。また、このような捉え方が背景にあるため、幼児への援助や働きかけをとするならば、「くんが自分でやりたいと言っているから、見ていてあげよう」「自分でできるようになりたいって言っているよ。応援してあげようね」といったように、学び手の意思を尊重するよう促すと報告していた。

一方で、欲求明示がない状況においては、幼児に期待する教示行為の内容も、またその

ような期待をもつ理由について、保育者は、直接的な欲求（自分でやりたい）が学び手から得られなくても、幼児に「教えないで見ている」ことを期待していた。期待の理由を分析したところ、保育者の多くは「困っているときには学び手が自分から伝えることが大切である」と考えており、自分から助けを求めるまでは、他者はすぐに教えずに待っているべきであると理由付けていた。保育者たちは、「教えてほしいか聞いてごらん」「ちゃん、自分でやりたいと思っているかな？ どうか？」といったように、相手の欲求を尋ねるように働きかけると述べていた。

この結果は、保育者が子どもどうしの教え合いをどのように捉えているか、子どもどうしの教え合いという状況で、子どもの発達のを大切にしているか、ということも示している。先に述べたように、子どもは、教え合う関係を通して他者への共感を育み、新たな自他認識を発達させていく（服部, 1998）。子どもの教示行為が発達していくことは、幼児期後期の人間関係形成にも重要であるが、保育者は、教え手だけでなく、学び手の意思表示や主体性に重要性を見いだしているといえる。このことは、教え合いを通して他者の共感を育み、自他認識を発達させていくため、自分の意思、欲求を相手にしっかりと伝えることも重要であると保育者は考えているといえる。教え合いや教示行為がうまく進行することでコミュニケーションは深まってくと思われるが、その教え合いを円滑に進めていくためには、お互いの意思や欲求を的確に理解し、尊重することも大切である。教え合いという場合は、教える子どもと教わる子どもの相互的なやり取りであるので、教える側が学び手の欲求（教えてほしいのか、自分で取り組みたいのか）を理解しているかどうかだけが問題なのではなく、教わる側も自分の意思や欲求を的確に伝える力が必要であると、保育者は考えているのであろう。

幼児期後期にたびたび見られる教え合いという場面において、子どもが「学び手のためにあえて待つ、見守る」といった抑制的な行為をすることは、学び手が自分自身の力でやり抜くことを見守るだけではなく、学び手の意思表示や主体性を促し、尊重することにもつながるのかもしれない。この研究成果については、名古屋短期大学研究紀要第 52 巻において報告した。

成果のまとめ

本研究の意義は、幼児の「教えないで見守る」ことの発達とそれに対する保育者の認知や働きかけを検討できる点にあった。幼児の「教えないで見守る」ことへの理解は、年中児から年長児にかけて一部変化するが、保育者は子どもの年齢にかかわらず、「教えないで見守る」ことを幼児に期待していることがわかった。この結果から、保育者の子どもの教示行為に対する期待や働きかけが、年長児における「教えないで見守る」力の獲得に影響を与えている可能性が示唆された。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 3 件)

小川絢子 (2014) 子どもの教える行為に対する保育者の期待—理由付けの自由記述分析から—、名古屋短期大学研究紀要、査読無、52、37-44.

小川絢子 (2013) 「心の理論と」保育—保育の中の子どもたちにみる心の理解—、発達、査読無、34、42-47.

小川絢子 (2013) 子どもの教え合いを支える保育者の認知—保育者養成過程学生との比較—、名古屋短期大学研究紀要、査読無、51、83-90.

〔学会発表〕(計 3 件)

小川絢子 (2013) 子どもの教え合いを支え

る保育者の認知—保育者養成過程学生との比較—、日本心理学会第 77 回大会、札幌コンベンションセンター。9 月 19 日～9 月 21 日。

Ayako Ogawa (2013) The development of inhibitive teaching behavior and relations to theory of mind in preschool children. The 16th European Conference on Developmental Psychology. Lausanne University, Switzerland. 9 月 3 日～9 月 7 日。

小川 絢子 (2012) 幼児期における「教えな
いで見ていること」の理解の発達, 日本心
理学会第 76 回大会、専修大学。9 月 11 日～
9 月 13 日。

6 . 研究組織

(1)研究代表者

小川 絢子 (OGAWA, Ayako)
名古屋短期大学・保育科・助教
研究者番号 : 6 0 6 0 9 6 6 8